
ヘルサイラ ~ werewolfの物語 ~

月代 唯

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

ヘルサイラ〜werewolfの物語〜

【Nコード】

N7164I

【作者名】

月代 唯

【あらすじ】

狼人間は夜になると、自我を失い人を殺す・・・。

5才の頃に狼人間に噛まれたヘルは女吸血鬼と出会い、発狂を抑える代わりに吸血鬼の使い魔となる契約をした。

序章は残酷な描写注意！一章からは恋愛ジャンルが入る予定です。

序章

嫌いなモノならたくさんある。

まず、人殺し。

テレビとかで毎回ニュースになる。

おかしい。絶対狂ってる。

人の命を簡単に奪える奴なんか大嫌いだ。

血。

赤い色も好きじゃない。

あのおぞましい光景を思い出す。

酒臭い吸血鬼。

・・・これは個人的なことだからどうでもいい。

一番憎むべきものは狼人間。

そして、オレの両親を殺した・・・自分だ。

序章（後書き）

これはファンタジーに分類するのかそれともSFに分類するのか分
からない・・・。
というか2つとも合っていない気がする。。

？ 噛まれた子供（前書き）

この話には、一部残酷な描写が入っています。
読んでいる途中でもし、不快感を感じた方はすぐさま読むことをやめていただくことをおすすめします。

？噛まれた子供

ここは、ロシアのどこかの州のどこかの町。11月になり、町にはきれいな雪が降っていた。

毎年、この時期になると子供達は大はしゃぎである。だが、大人達は逆に不安と恐怖心を募らせていた。

理由は一つ。

町から出れば、そこは狼が出没する危険地帯だったからだ。

特に冬になると、狼の餌が少なくなるので町へ近寄ってくる。他の町などに行く者達は皆、犬ゾリと鉄砲が必須だった。

もちろん、人間も全く無抵抗な訳でもない。この町には狼のための警備隊があり、町の周りには狼対策用の柵が張り巡らされていた。

それでも毎年必ず、どこからか侵入した狼からの被害は出た。

僕はそんな町に住んでいた。

「こらっ！あんまり離れないで！」

「はい・・・」

お母さんに呼び止められて、急いで駆け戻る。

その頃の僕はまだ子供で、狼の被害とか大人達の不安などは全く知る由もなかった。

・・・いや、ひょっとしたらうすうす気づいていたのかもしれない。でもとにかく、僕にとって今日この日だけは、他のことはすべて一切関係がなかった。

だって今日は、僕の5才の誕生日だから。

それで、僕ははしゃいでいた。今日は今までで一番良い日になるはずだった。

僕のために用意されたプレゼントがある。そして、家に帰れば豪華なバースデーケーキがあるのだ。だがその声を引き金に、僕の幸せは一瞬にして終わった。

「……オイ、ぼうや……？」

「……っ!？」

誰かに声をかけられて瞬間、僕は動けなくなった。

直感で後ろにとつともなく恐ろしいものがあることが分かった。でも怖くて振り向くことが出来ない。

それでも、正体を確かめないといけない。と、自分に言い聞かせて動かせない首を無理やり動かした。

「……^{シアフセ}幸せそうだなあ？」

そこにいたのは見知らぬ男だった。でも、顔中に毛が生え始めてそれはもう人ではなくなった。

「た……!」

(助けてっ!)

叫ぼうとしたが、叫べなかった。首に激痛が走り、声が出せなくなった。

僕が地面に倒れると同時に遠くで悲鳴が聞こえた。鉄砲も鳴った。僕を噛んだ狼は銃声を聞いて逃げたことをなんとなく感じた。

(……頭が痛い……体中も痛い)

首の周りが温かく感じる。……これが血なのか。

そんなことを考えていた時、誰かが僕の体にすがり泣いた。女の人

の声だった。

(・・・うるさいナ・・・)

それが自分の母親だと知っていた筈なのに。そのとき僕は、なぜかそう思っていた。

(・・・邪魔ダ・・・キエ口・・・！)

「おい・・・！」

僕の体に毛が生えるという異変に気づいた父親は慌てて母親に声をかけた。

だがもう遅い。

次の瞬間、僕は狼の姿で自分の両親を手にかけていた。

？ 噛まれた子供（後書き）

2月9日

国をカナダからロシアに変えました。

？運命の出会い（前書き）

この話には、一部残酷な描写が入っています。
読んでいる途中でもし、不快感を感じた方はすぐさま読むことをやめていただくことをおすすめします。

？運命の出会い

口の中が異常なほど甘ったるかった。

目の前には、僕が今かぶりついている死体がある。そして、その近くにもう一つ。他の人間は狼が現れたときにほとんど逃げていったようなので、人影はもう見当たらない。でもとりあえず、僕は目の前にある食事をすませることにした。

「・・・なんで泣いてんの？」

「・・・っ!？」

その声で僕は瞬間的に一步後ろへ飛び退いた。

そこには黒いロングコートを着た女がいた。こんなに近くにいたのになんで気がつかなかったのだろうか？

しかもむかつくことにその女は、狼の姿である僕を見て平然と笑っていた。

「・・・何だお前・・・？」

僕が唸ると、女は「可愛い反応だねえ」とからかってきた。その受け答えで、僕は完全に舐められているなと悟った。

ならば、どうやって立場を逆転させようか？今僕はこの女に攻撃することができる。ならば、思いっきり噛み付いて致命傷を負わせてみるのが良いかもしれない。

僕がそんなことを考えていると、女の方もさすがに身の危険を感じたようだ。

「あらら、少し怒らせちゃったかな？・・・私はエリス・D・クォーター。ただの通りすがりのヴァンパイアだよ」

「ヴァンパイア・・・だって・・・？」

もし僕が今までの僕だったなら、その女の言った事はとても信じられなかっただろう。

しかし、彼女からは「（人間の血を含む）さまざま動物の血の匂いがした。その理由がヴァンパイアだということならば、一応筋は通っている。

それに、”ヴァンパイアなどはない”と言い張るには、今の自分の姿では大いに無理があった。

エリスと名乗ったヴァンパイアは、しばらくしてからため息を吐いた。

「・・・私は別に君の邪魔をするつもりはないんだけど・・・泣いてるって事は、本当は殺したくなかったんじゃないの？この人達を」

そして、僕はもう一度死体を見た。話している間にどうやら、頭が冷えて少し落ち着いたようだ。

死体は見るからに無残だった。二つのうち一つの方は、内臓が半分ほど失われていた。

その内臓が一体どこにいったのかは、深く考えなくても分かることだ。

「・・・僕の両親だ」

「ああなるほど。通りで血の匂いが似てるわけだ」

と、女吸血鬼は勝手に納得した。僕はそれに反応しなかった。

「・・・僕が殺したんだ」

「うん、知ってるってば」

女は返事をしたが、その言葉は自分自身に向けてはなつた言葉だった。悲しみと後悔と絶望が心の中に渦巻いていた。

自分が殺したから、それを嘆き悲しむ資格など僕にはない。あるのは、罪の意識と自分への憎しみと、化物になってしまったという事実だけだった。

「まあ、あんまり気落ちしない方がいいと思うよ？仕方のないことだったんだから」

「何が仕方のなかった事だつて言うんだよっ!？」

この状況でもなんでもないことのように言う吸血鬼に、僕は怒鳴った。

そんな僕を見て、女も流石に悪いなと思ったらしい。いきなり、淡々と説明し始めた。

「・・・狼人間は、発狂すると人を憎み、人を殺すようになるんだよ。でも、実はそれを防ぐ方法が・・・死ぬこと以外で、今すぐ出来る方法が一つある」

その言葉を聞いて、僕はハッと顔を上げた。

「私の使い魔として、契約してみる気はある?・・・小さな狼君」

街灯に照らされて、エリスという名の吸血鬼はニコニコと笑っていた。

？運命の出会い（後書き）

最新まで時間が経ってすいません；
序章は、あと一話ある予定です。

？夢から覚めて

目が覚めた瞬間、背中やら腰やらから痛みを感じた。長い間、椅子に座っていた所為だ。

一瞬、ここがどこだか分からなかったが、しばらくすれば頭が働くようになった。

オレは飛行機に乗って、することもないんで寝ることにしたんだ。った。

窓の外は真っ暗で、いくつか星を見ることが出来た。持っていた時計を見てみると、十時頃らしい。時差を直してはいないので、たぶん本当はもっと遅い時間帯だろう。周りを見渡すと、ほとんどの人が熟睡していた。

だが、少しぐらい例外はある。例えば、オレの目の前に座っている変わり者の女吸血鬼とか。

「やっと起きたか……ちょっとうなされてたみたいだったけど？」

彼女はにこにここと笑顔でオレの様子を伺った。……相変わらず機嫌が良さそうだ。

オレは大きいため息をついた。

「……それを見てたんなら起こしてくださいよ」

「あははは……ゴメンゴメン」

女吸血鬼、もとい、エリスさんは笑いながら謝った。本人はどうだか知らないが、傍から見れば全く心がこもっていない謝罪に思われ

るだろう。

オレは、エリスさんがそういう人だということを了解していたのであまり気にしなかった。

「・・・エリスさんと初めて出会ったときの夢を見ていました」

オレは静かにそう告げた。

あの日、オレは狼人間に噛まれて人殺しの化物になるところを、たまたま通りかかったエリスさんに助けられた。

エリスさんによれば、ヴァンパイア達は動物と血の契約を交わして自分の使い魔にすることがあるらしく、大抵はコウモリなどを使い魔にするのが一般的らしい。使い魔になった動物はヴァンパイアの血の力で本来の寿命の約五倍近くも長く生きることが出来るようになり、身体能力も格段に上がる。その代わり、契約をしたヴァンパイアの命令には絶対に背くことは出来ない。どちらかが死ぬまで、使い魔は一生そのヴァンパイアに仕えることになる。

エリスさんは、使い魔の契約をすることで狼人間の発狂を制御することが出来るかもしれないと教えてくれた。狼人間を使い魔にすることなんて前例に無いので定かではないが、人間を使い魔にして非常食にしたヴァンパイアもいたらしいのでたぶん大丈夫だろうとも言った。結果的にエリスさんの予想通り発狂を抑えることは無事成功し、オレはエリスさんから使い魔としてヘルⅡサイラという名前を付けられたのだった。

あの日から、もう十年も経つのか。

「あー・・・あの頃のヘルは可愛かったよねえ」

「・・・思い出す所はそこですか」

わざとらしくため息を吐きながら嘆くエリスさんに、オレは思わず
つつこんでしまった。

「だって、私を見てびくびくしててさぁ・・・本当にからかいがい
があったよねえ」

「・・・もういいです止めてください」

初めてエリスさんと会ったときにはこの人の実体がつかめずいろ
いと警戒したのだ。使い魔になってからやっと、オレはだんだんと
エリスさんがどういう人なのかが分かってきた。

エリスさんは、とにかく変わった人だった。見た目は二十代、三十
代くらいに見える彼女は、ヴァンパイアだけあってそれなりに美人
だ。こういうのが大人の魅力とかいうものなんだろう。でもそれは
見かけの話だ。

エリスさんの使い魔として生きていく上で、オレは大変な苦勞を強
いられていた。自由奔放な性格で大変な面倒臭がりやなので、洗濯
や掃除などの家事全般、この人の生活はほぼすべてオレが管理しな
ければならない。おまけに酒癖が悪く、機嫌が悪いとオレに八つ当
たりしてくる。

だが、オレは彼女が本当に悪い人ではないということを知っていた。
なにしろ、この人がいなければたぶんオレは人殺しの化物になるの
が嫌で死んでいただろう。だから、オレは少なからずエリスさんに
は感謝していた。

「ひよっとしたらヘルが見た夢は、これから何かが始まる前兆なの
かもね」

しばらくしてから、エリスさんは珍しく真面目な顔で呟いた。

「・・・なんでそう思うんですか？」

「女の勘ってヤツだよ」

そういつてエリスさんはフツツと笑った。

「これから行くのは和の国『日本』だからね。・・・しほらく、
陶アンパイアハンターしい奴等は来ないだろうからのんびり出来ると思っつよ」
替ウ

一章 桜と小さな狼

生まれて初めて、桜というものを見た。

その花は、オレにとつては眩し過ぎて、酷く不釣り合いなものに見えた。元から合い慣れることは無いということは知っている。なぜなら、オレはもう人間ではないから。

オレとエリスさんが日本に到着したのは、まだ春が訪れて間もない3月頃だった。そして、エリスさんはすぐに自分達の泊まる所やオレの通う学校を探し始めた。これがただの観光なら学校に通う必要もないのだが、残念ながらオレ達はそうではない。それに、この国では義務教育途中の子供が学校に行かずふらふらしていると面倒事が起こる。うん、この国の法律は一通りざっと読んで多少は把握してある。

学校へ通う手続きをする際、オレとエリスさんはそれぞれ”宮牙^{くが}リユウ”と”宮牙^{みやが}美月^{みつき}”という偽名で登録した。なぜか、エリスさんは偽造の身分証明書やパスポートをいくつも持っている。それはヴァンパイア絡みの秘密ルートで発行されるらしいが、そのおかげで手続きなどは難無く解決された。だから、ここで隠れて暮らすことはもう何の問題も無かった。・・・唯一つ、問題があるとすればそれは、オレがこれから通う学校についてだった。

「さて、問題です。ヘルが通うのは中学校と小学校のどちらでしょうっ？」

予想通り、エリスさんはニヤニヤと面白がるようにオレに尋ねてきた。

本来ならばオレは、真っ先に中学校だと答えるところだ。いや、む

しろそう答えたい。なぜならば、十五年生きているオレは一応十五歳のはずだからだ。なぜ”はず”なのかというと、オレは血の契約で使い魔になったため、吸血鬼の血の所為で見た目は推定7歳ぐらい・・・つまり小学生にしか見えないからだ。

だからオレは、いやいやながらも「小学生ですね」と答える。実際、この見た目では中学生だということ信じることが困難である。

そういう訳で、本来の小学生ならわくわくどきどきの気分になるはずの桜咲く小学校の校門前という場所を、オレは複雑な心境で歩いていたのだった。

「今日から、この学校に通うことになった空牙リュウです。お父さんが外国人のハーフで、日本語はほぼ大丈夫です。よろしくおねがいします」

転校生にはよくあるシーンで、オレは子供ヴァージョンの声で無邪気っぽく自己紹介しなければならぬから、小学生というのもしろいろ大変である。もちろん、父が外国人だのハーフだのは唯の”設定”だ。

新しい学校でオレは、いろいろな検討の結果、第四学年に入ることにした。そこが、体が小さいことを成長が遅いという言い訳で納得できるギリギリの学年だった。それ以下の学年に入るとは、自分の自尊心について悩みそうだから却下だ。だが教室に入った瞬間、オレはこの学年にするべきではなかったのではないかと考え直させられるはめになった。

女子がキヤーキヤー騒いでいて正直騒々しい。しかも自己紹介の時

に言った”ハーフ”というキーワードで余計ボリュームが上がったようである。そういえば、小学四年生になれば思春期か・・・とか、いまさら思っても仕様が無い。

自己紹介が終わった後、先生が空いてる席を指差して座るように言った。そのときオレは、その隣の席に座っている女子が体をビクつかせる瞬間を見た。とりあえず気にしない振りをして席に向かうと、間誤付きながらもそいつは小さく挨拶してきた。

「えっと・・・よ、よろしくね？」

「ああ、よろしく」

オレは素っ気無く返して、椅子に座った。どうやら日本の学校生活も、いろいろと苦労しそうである。

一章 桜と小さな狼（後書き）

最新は遅いのに短くてすいません！（汗）
今日から、少しずつ人物紹介をしていきたいと思えます！
正直言つて、容姿についてはつきりさせたいだけなんです……
ね。

（人物紹介）

名前：ヘル＝サイラ

種族：狼人間（元人間）

出身：ロシア

年齢：15歳（見た目は7歳）

容姿：銀髪に銀色の瞳

要綱：5歳で狼人間に生まれ、吸血鬼エリスの使い魔になる。
それから約10年間、エリスと共にいる。

日本での偽名は”宮牙リュウ”

名前：エリス・B・クォーター
ブラッディー

種族：吸血鬼

出身：不詳

年齢：不詳（みためは20代から30代ほど）

容姿：カールしたブロンドの髪に赤い瞳

要綱：ヘルが5才の頃に出会う。

日本での偽名は”宮牙美月”

ヘルをからかうことを日々の楽しみにしていたりする。

？第一次授業戦

自己紹介をして一時間目の授業が終わると待っていましたと言わんばかりに、女子で構築された軍隊がヘルに群がっていった。初日に転校生が質問攻めに遭うことは当たり前前の事だが、この数は普通に比べれば異常に多い。ただでさえあまり人に関わりたくないヘルにとっては、他の奴なら喜ぶであろうこの状況は地獄だった。

「ねーねー！宮牙くんの好きなものって何？」

「・・・ないな」

「どこから転校してきたのー？」

「・・・知るか」

初対面のはずなのに、質問してくる女子は、なぜかすごく馴れ馴れしい。別に仲良くするつもりもなかったヘルは適当に片っ端からあしらっていく。だが、地獄の質問攻めは一向に終わる気配を見せなかった。早くこの状況から解放されたいと思いつつ、ヘルは何度もちらちらと時計を窺っている。やつとの事で授業開始のチャイムが鳴るとホッと安堵のため息をついた。

次の授業は算数だった。

数学というものは基本的に全世界共通だから、今までいるんな国の学校を何度か巡りながら、ヘルは飽きるほどそれを習ってきた。だから、彼にとって算数の授業は退屈なものに他ならなかった。それに、何度も同じような授業を繰り返す原因が自分の体が成長しないからということも、憂鬱の理由に含まれていた。

次から授業中に読む本とか持っていてこようかな・・・退屈しないよ
うな中学生用の参考書とか。

よし、絶対に持つてこよう。とヘルは心に誓った。実際、別に誓う必要は無いのだが。とりあえず、何もすることが無いこの授業は寝て終わらせることにした。いつもは夜にあの吸血鬼がいるので寝れない為、机にうつ伏せになっただけでヘルはすぐに眠ることが出来た。

「こらっ！授業中なんだから起きなさい！！！」

眠って三秒もしないうちに、担任の女の先生に怒鳴られて起こされた。が、眠って三秒もしないというはヘルの気のせいらしく、時計が正しければ二十分程は寝ていたらしい。ヘルを起こした先生は咳払いをして、黒板に書かれた問題を指差した。

「リュウくん。この問題分かるかしら？」

それは、3桁の割り算の問題だった。ちなみに、周りの生徒達はほとんどがこれの解き方を知らない。なぜならこれは例題で、ここから3桁の割り算の解き方について説明する予定だったからだ。教師である彼女は、寝ていたヘルにわざと分からない問題を出して、授業に関心を持ってもらおうと思っていた。だがそんな企みは、彼女にとって予想外のヘルの答えによって成功することは無かった。

「・・・132です」

ヘルは、この問題の答えを暗算で、しかも十秒足らずで答えた。大

人ならばそれが出来ても別に驚きは無いのだが、彼女はヘルがこの問題を当たり前に解く事までは予想していなかったから少し驚いた。

「正解です・・・でもリュウくん。授業が退屈でも、できれば寝ないで貰いたいんだけど？」

結局、今回の授業で先生はヘルに注意をすることしか出来なかった。ヘルが授業中に寝ていたからなのかそれとも問題を簡単に解いてしまったからなのか知らないが、周りでは生徒達が少しざわついていった。しかしそれを、当の本人はそんなことを全く気にせず、また机にうつ伏せになって残りの時間を過ごしていた。

そして、授業が終わるチャイムが鳴ると、ヘルは女子軍隊に包囲される前に急いで教室から逃げ出したのだった。

？第一次授業戦（後書き）

第一次世界大戦みたいな感じで学校での戦いの勃発です。そんなに酷くありませんけど（笑）
もちろん、第二次もある予定です

？ヘルのお買物

小学校の一日目の授業はほぼ午前中で終わる。ヘルは、町の様子を
知るためにいろいろと見てまわりながら家へと帰った。

この家というのは、日本へ来たときにエリスさんが見つけた2L
DKの賃貸マンションのことである。

少々高かったが彼女にはそんなことを気にする必要はなく、その分
部屋の中はとても良かった。だからこそ、あの女吸血鬼にこの部屋
を住まわせるのはすこし勿体無い気がしていた。

玄関のドアを開いた瞬間に、鼻につく血と酒の臭い。・・・これが
その理由である。

「血生臭・・・っ」

玄関に靴を放り出し早歩きでリビングに駆けつけると、そこには真
っ赤な液体が入っていただろうと思われる酒瓶が床に転がって異臭
を出しており、それを飲んでいただろうと思われる吸血鬼はソファ
ーの上でぐっすりと眠っていた。ちなみにこの酒瓶には、血がブレ
ンドされているお酒が入っていた。一般にヴァンパイアにしか売ら
れていない特別なモノだ。もつとも、普通の人ならば飲みたいとも
思わないだろうが。

これ以上異臭を部屋に充満させたくないで酒瓶を拾い集めている
と、どうやらその音でエリスさんは目を覚ましてしまったようだ。

「・・・ん？・・・よう、おかえりー」

「・・・おはようございます」

自分で言った言葉と今の時間に少々違和感を感じたが、気にしないことにした。エリスさんが寝返りをしてこちらを向く。

「んで、学校はどうだった？」

「最悪でしたよ」

”最悪”という、オレの一言にすべてを感じ取って、エリスさんは笑った。笑われた事にオレはムツとしながら、拾い集めた酒瓶を台所の方へ置いた。

「でも学校が楽しいかどうかは、やっぱり気持ちの持ち様だと思うよ？」

そういつて、彼女は欠伸を押し殺した。

どんな事やどんな場所だって、楽しいと思えば楽しくなるものだ。だが逆に、楽しくないと思えばそれは楽しくなくなってしまう。そんなことぐらい、自分だって分かっている。と、ヘルは心の中で呟いた。だが、今のオレにはきつと自分の人生が楽しいなどは到底、思うことはできないだろう。

「・・・そういえば、買いたい物があるんで出かけてきます」

少しの沈黙の後、ふと授業中に読む本を買う必要があることを思い出した。

「ん、了解」

エリスさんは、オレの報告を簡単に返すと欠伸をして、背を向けるように寝返りする。たぶんこれは二度寝する気だなと直感的に理解した。必要なお金だけ持って、ヘルはまだ血の臭いが残っている家

をあとにした。

さて、本屋は一体どこにあるのだろうか。

学校帰りの時にも少し見て回りはしたが、基本的にヘルはこの町には不慣れである。

それでもヘルが学校や自分の家に迷わずに行くことができるのは、狼人間になった時に得た鋭い嗅覚のお蔭だ。一度学校へ行けば、帰りの道は匂いを辿れば一直線。肉屋も酒屋も匂いで探せばすぐに分かる。

だからヘルは、それらしい匂いと己の勘を頼りにどうにかして本屋へ辿りつくことが出来た。

店内に入ると、ヘルは勉強用教材関連の本の棚のある場所を見つけ向かった。そして、買いたい本を探そうとした瞬間、ヘルは絶句した。

この本棚には、下の方の段には小学生用の学習ドリルなどが、そして上の方の段にはヘルの目当てである中学生や高校生用の参考書や問題集が置いてある。この配置は、それぞれの求める本と求める人を考えた工夫になっているのだが、子供の体であるヘルにとってはそれが仇となったようだ。

(・・・とどかねえ！)

背伸びして手を伸ばしても、それでもまだ本は十センチほど上にあつた。一体何度、自分の体を怨めば良いのだろうか・・・とヘルは頭を抱えた。

ともかく、これでは欲しい本が取れないので、物凄く恥ずかしいがこの店の店員に代わりに取ってもらう他に方法はない。周りを見渡すと、ちょうど近くに三十代後半ぐらいの話しかけやすそうな女の店員がいたので、ヘルは声をかけた。

「あのー・・・欲しい本が上の段にあつて届かないので取ってくださいませんか？」

「あ、はい。いいですよ」

その人はヘルの頼みを快く引き受けてくれた。まあ、仕事をしてるんだから取ってくれないと困るのだけど。

店員は、ヘルの指示した数学と理科の参考書一（ちなみにそれぞれ中学三年レベルである）を棚から取り出した。パラパラと大まかに見て内容を確認した後、これを買うことにした。最初はこれで買物は終わるつもりだったのだが、ヘルはついでに店員にこんなことを聞いてみた。

「あと、このお店に医学書つてありますか？」

「医学書ですか？・・・それなら、こちらの棚にありますよ」

そう言つて店員は、ヘルを棚の場所まで案内してくれた。

実はヘルは、前々から医学を学びたいと思つていた。自分には人を傷つける力しか持つていないからこそ、人を助けることの出来る知識などを少しでも知りたかった。もちろん、本で学べることは限られているだろう。でも、将来医者になるわけではないし、ヘルにとつての時間はたくさんある。暇な時に少しずつ読んで学んでいけばいいと、そう考えた。

「ここから、ここまでが医学関係の本になっております」

店員が示した場所には、思ったより種類が豊富な医学書が並んでいた。この本屋は最高だなと思いつながら、ヘルは医学全般についての内容の本と体の構造や仕組みに関して詳しく書かれている本、そして外傷の治療の仕方について書かれた本を買うことにした。とりあえず、いまずぐに役に立ちそうな分野を選んだのだ。そこに病気の分野を抜いたのは、吸血鬼や狼人間が病気にかかるなんて聞いたことも無かったからだ。

結局、五冊の本で計六千円程の買い物になった。吸血鬼の血で身体能力が上がっていても、五冊の本を持って帰るのは少し苦労した。だがこの時ヘルが医学書を買うことが、ずっと先の彼の未来に大きく関わることになるうとは、その時のヘルはもちろん、他の誰も知る由は無かった。

？ヘルのお買物（後書き）

ヘルのお買物の前半部分は、昔に書いた原稿をこれから買い物に行くという部分だけ少し加えながらもほとんど同じ内容で乗せました。

？結局、自己嫌悪（前書き）

タイトルのネーミングセンス皆無ですね・・・すみません。

？結局、自己嫌悪

「疲れる・・・」

男子トイレの中で、そう言って脱力するオレが居た。
なぜそうしているかを説明すると、話は数分前にさかのぼる。

昨日、参考書や医学書などの本を買ったオレは、授業中ずっとそれを読んで過ごしていた。

担任の先生は、オレのその行動に最初こそは眉を吊り上げていたようだが、参考書を読むことは自分に合ったレベルの勉強をするという事だと解釈してくれたのか、注意されることはなかった。正直、授業中気長に本が読めるようになったと言う事はオレにとってありがたかったので、オレは心の中で先生に感謝した。

だが、オレにとって気の休める時間は授業中だけだった。

一体何が悪かったのか。まあ、原因はほぼ推測できるが。
授業が終わって休み時間になると昨日と同じように女子達に取り囲まれた。

「宮牙くんってすごく難しい本を読んでるんだねえ！？」
「スゴイ〜あたしにも見せて〜」

昨日の状況と一つだけ違うとしたら、こいつらの話の内容が本にな

っていることだろうか。

とにかく、女子にモテたいと思っっているわけではないオレにとって、この状況は不愉快極まりない事ではない。

昨日はまだ問いかけられた質問をいくらか答え返していたが、今日は何も答えないまま早歩きで教室を出ていくことに・・・否、逃げることにした。

それで結局、オレは女子が決して入ることのできない男子トイレにいるというわけだ。

オレは出来れば人とはあまり関わりたくない。それは、オレが人でないことを気づかれたくないから。そして、オレが持ってしまった人を傷つけることが出来る力で誰かを傷つけたくないからだ。

だからオレは、ずっと人を拒絶しながら過ごしてきた。今まで訪れた学校では、そんなオレの様子を察してわざわざ関わろうとする奴はいなかった。むしろオレにとってはそれが好都合だった。

本当ならば、オレは学校になんて行きたくない。そもそも狼人間が学校に行く必要なんてないんじゃないのか？大体こういう事になっているのは

そこで、ヘルは考えるのをやめた。背後から微かに自分に向かって敵意のある気配を感じたからだ。

だがこれくらいの小さな敵意はどうってことはない。オレやエリスさんがいつも相手にしていたのは敵意以上の殺気ヴァンパイアハンターだったから。それに比べれば、ずっと友好的だ。

「おい。お前、昨日来た転校生だよな？」

振り返ると、オレを睨む様な目で見ている男子がいた。たぶん上級生だろう。そいつはオレよりも一回り大きかった。まあ、そう見えるのはオレが小さいからなんだけど。

彼は、オレを脅すために低い声で言った。

「ハーフだか何だか知らねえが、あんまり調子にのるなよ？」

もし、これが普通の小学生なら誰だって怖がるだろう。その言葉はそれくらい凄みがあった。だがあいにく、オレは狼人間であり実際にはオレの方が年上なのでそんな恐ろしさは微塵も感じられない。

上級生は、それだけ言って満足したのか脅しの言葉があまり聞いていないことには気づかずそのままトイレから出ていった。それを、ヘルは少々呆気にとられながら、見送った。

一体、どこが調子に乗っているように見えるのだろうか。そう思いながらヘルは、恨まれる事に思い当たる節々を振り返ってみた。

例えば見た目とか。

残念ながら容姿は生まれた時から既に決められているものなのでオレの所為ではない。そもそもオレはそんなに格好良い顔というわけではないはずだ。女子が騒ぐのは唯単にオレがこの国の人種ではないから。それだけだ。というよりか、それだけで騒がれるというのも迷惑な話だ。

いや、ひよっとしたら授業中に本を読んでいたことに反感を抱いたのかもしれない。

そういえば昨日は寝てもいた。傍から見れば、完全に授業を舐めきっている。だが、聞き飽きた授業に本を読むことと寝ること以外に何をしろというのか。

(・・・これじゃ改善の仕様がなないじゃないか！)

自分の問題に、結局最終的には開き直っていることに気づき、思い切り落胆するヘルだった。

？ 結局、自己嫌悪（後書き）

遅れてすみません！

こんな小説でも、お気に入り登録してくださる方がいてくださって感激です！

何度かヴァンパイアハンターの名前が出てきますが、本文では説明する機会が無かったのでここで簡単に説明します。

ヴァンパイアハンターは、その名の通りエリス・クォーターなどのようなヴァンパイアを狩る職業の人たちの事です。

そのため、エリスさんたちは彼らに見つからないように色々な国を転々としているわけです。

一章では名前しか出てきませんが、二章ではヴァンパイアハンターも関わる予定です。

？ 前期学級委員

「結果、前期の学級委員の男子は宮牙くんに決まりました！」

その言葉と同時にクラス全体から歓声があがった。

そして、ヘルは一人思う。

日本こゝに来てからずっと、不幸しか経験していないのではないかと
・
・

次の授業が始まるチャイムが鳴りヘルが教室に戻ると、ちょうど担任の先生が教室にやってきたところだった。

ヘルは先生の前を通るついでに軽く会釈してから、すばやく席に付いた。

「それでは、今日の学級活動は委員会の人を決めたいと思います」

担任の先生は、そう言うってから黒板に一つずつ委員会の名前を書き始めた。

ヘルは一瞬、前の授業に読んでいた本を読もうと思っ出て出し掛けたが、仕舞う。“インカイ”という言葉は初めて聞いたが、黒板に書かれる文字を見た感じでは、分かりやすく言っ”特定の仕事をしなければならぬ人”を決めるようだ。黒板に書かれてあったのは、保険委員、給食委員、放送委員、図書委員、飼育委員、そして

学級委員。すべて、名前を聞いただけでどういことが仕事になるかは大体分かる。

「まず、学級委員を決めたいと思います。立候補や推薦はありませんか？」

黒板にすべて書き終えた後、クラスを見渡しながら先生が聞いた。だが、ヘルは何もなかった。

唯でさえエリスさんのことやこの学校にいることなどで頭を悩ませている時に、委員会なんてするつもりはない。そう、やる気なんかさらさら無かった……のに。

「はいっ！私は宮牙くんがいいと思います！！」

いきなり、女子の一人が手をあげて言った。そして、それを聞いた他の女子達はあまつさえ、男子達もそれに賛成と騒ぎ始める。ヘルは、何故こんな状況になっているのかを数秒かかって理解した。

女子達は、どうしても”宮牙リュウ”に近づきたいのだ。学級委員の男子の枠にヘルを入れ、女子の枠には自分が立候補して同じ学級委員になれば、一緒に入れる時間を獲得できる。

そして男子達は、面倒な委員会をヘルに押し付けることで自分は逃れようという魂胆なのだろう。

「えっと……皆はこう言ってますが、宮牙くんはどうします？」

騒ぐ生徒達に困惑しながら、先生はヘルに聞いた。他の生徒達が推薦しても、本来は本人の意見や事情が最も優先される。だが、他に推薦や立候補がない場合はどうしようもない。不本意でも推薦された奴が学級委員になるしかないのだ。

すでにほぼ退路を断られた状態でも、ヘルは最後の望みを賭けてきつぱりと答えた。

「ものすごく嫌です」

だが結局、全否定してもヘルが学級委員になることから逃れることは出来なかった。

案の定、オレが学級委員に決まった後はたくさんの女子達が学級委員に立候補したが、それを見かねた担任の先生は一番真面目で成績の良い女子を学級委員に指名した。指名された女子は菅沢梨苑すがさわ りおんという名前で……奇遇にも、オレの隣の席にいた奴だった。

「……宮牙くんは、誰かに話しかけられるの嫌い？」

放課後、廊下で菅沢梨苑と歩いていたヘルは、彼女に急に話しかけられた。

ちなみになぜヘルと梨苑が一緒に歩いているのかというと、学級委員やその他もろもろの委員はこれから委員会集会があるからだ。学級委員が集まる教室は、他の委員会と違って少し特別なミーティングルーム。転校してきたばかりのオレはミーティングルームの場所が分からなかったので、梨苑に案内してもらっていた。

「・・・なんで？」

そういえば、コイツは隣の席に居たが一度も話しかけられたことが無いなということに気がついた。ヘルが聞き返すと梨苑は少しまごつきながら言った。

「だって、休み時間になってみんなが集まってくるとすごく嫌そうな顔をしてたから・・・」

「別に話しかえられるのが駄目なんじゃないけど・・・人に群がられるのが嫌だ」

「あ・・・そっか」

梨苑は何かに納得するように呟いてから、その後は何も喋らなくなった。その時に安堵の溜め息を吐いていたが、ヘルは梨苑に関心を向けていなかったので気づかなかった。

? 前期学級委員(後書き)

実は忘れてたんじゃないのかとか思われた登場人物紹介
いや、忘れてはいません。様子を見てただけ(殴

人物紹介

名前：菅沢すがさわ梨苑りおん

種族：人間

出身：日本

年齢：10歳

容姿：黒髪のセミロング。黒い瞳。

要綱：ヘル隣の席に座っている女子。

成績、生活態度共に優秀。そして性格も良い。(を指しています

(汗)

名前：鈴木すずき美奈子みなこ

職業：教師

出身：日本

年齢：20代後半

要綱：ヘルのクラスの担任の先生。

本遍に名前が出てくる予定なし。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n7164i/>

ヘルサイラ ~ werewolfの物語 ~

2010年10月12日17時05分発行